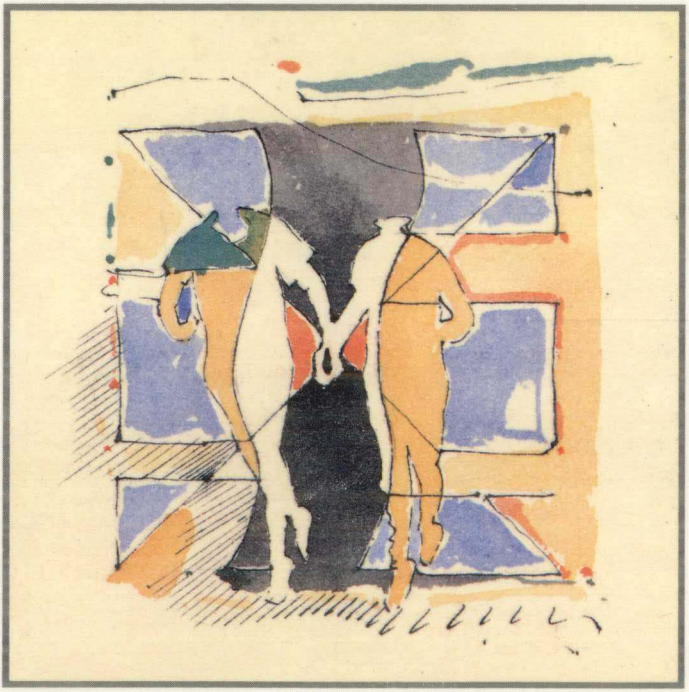
ガン病棟のカルテ

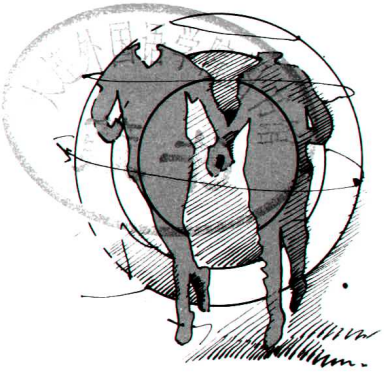
庭瀬康二



新潮社

ガン病棟のカルテ

庭瀬康二



新潮社

ガン病棟(びょうとう)のカルテ

定価 1050 円

印　刷　昭和57年2月20日
発　行　昭和57年2月25日
著　者　庭瀬康二(にわせこうじ)
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部 (03) 266-5111
　　編集部 (03) 266-5411
振替 東京 4-808
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　神田加藤製本株式会社
© Kōji Niwase, Printed in Japan 1982
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

はじめに

当然のことながら、『ガン病棟のカルテ』とはガン患者のカルテだけを意味してはいない。カルテには、医師はもちろんのこと、ガン病棟にかかわる全ての人たちが含まれている。

いや、私の書いたカルテとは、いま行なわれている現代医療そのままのカルテ――診療録のことだ。そういう表現が誤解を招くなら、私が行なった医療のすべてといっていい。

価値感の多様化、時代の混迷が語られ始めて久しい。私たちの未来への展望は茫洋としてはいるが、死ぬ、それもガンに罹り、苦しみながら死んでいくかもしれないという恐怖感だけは、確固たるものがある。

誰でも自分だけはガンを避けて通りたいと思う。それを証明するかのように、書店の本棚には驚くべき種類の「ガンもの」が並べられている。

わが国が高齢化社会を迎えて、日常生活のなかに沁みこんでくる老人問題のなかで、〝老化〟の表現であるガンは、このさき生活から消えることはあるまい。時代の進展は、医療が

引き受ける領域を確実にふやしていく。

しかし、乳児死亡率が世界最低レベルで、平均寿命も世界第一級であるわが国は、先人たちが夢にまで見た〝理想の国〟になったにもかかわらず、いや、なったがゆえにと言うべきか、私たちの老化と病気への不安、さらには生と死への絶え間のない恐怖は、一向に減る気配にない。

私が本書を書いた動機の一つは、日本人の四人に一人がガンで死ぬのだから、ガン病棟の住人になるというのは、われわれの人生の一部にさえなり始めているということで、したがって現在の生活の価値感が不明確なら、ガン病棟の住人のカルテもまた、同じように定かではないと思えるからである。

現代日本が物質的な豊かさを特徴とするように、医療も豊かになった。豊かにはなったが、医療は患者の経済的な要因によって決められるよりも、医師と患者の価値感によって決められるといってよい。その価値感が明らかでない時代に、われわれの医療が混乱するのも当然ではなかろうか。

誤解を恐れずにいうならば、われわれは〝ぜいたくな医療〟の前で貧しく悩んでいる。悩むだけでなく、様々な角度から医療を批判する。

医療の荒廃を批判するのもいい。医師をとやかくいうのもいいだろう。しかし、患者や家族が悩むのと同じように、医師もまた悩んでいる。

現代は、人類にとってなお書かれざる一章〝生と死のメニュー〟を前にして、患者も医師

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も必死に格闘している時代である。

本書は、その格闘の書、生と死の現場からの闘いの報告書である。

そういう意味で、本書はガン病棟の患者のカルテであると同時に、外科医学のメスの魅力につかれながら、結局はメスを捨て、ガン病棟に別れを告げて〃メデュトピア〃という新しい夢を追い始めた一人の外科医のカルテでもある。

本書を読んで、数ある「ガン医療物」とは違ったものを感じていただければ幸いであるが、同時に「ああそうか、そうだったのか」と相槌をうって、われわれの時代の〃生と死のメニュー〃を描こうとした私に、いくばくかの友情を抱いてくだされば、著者としてこれほどうれしいことはない。

《ガン病棟のカルテ》　目次

はじめに　1

第1章　丸山ワクチンか早期発見か　13

ガン保険　入院費が支払われる時の疑問　安心度とは何か　丸山ワクチン　ガンが治るとは？　人気の秘密　人間ドック　どこまで頼れるか　人間ドックを選ぶ心理　早期発見　ガンから逃れられる可能性は　四億五千万円の検査費用

第2章　外科医の一週間　39

外科医の一週間　患者のカルテを調べる　意外に少ないメスを握る時間数　手術後の方がたいへんだ　患者の秘密　見舞客の多い人少ない人　夫婦のガン共存時代　傲慢な医師　高級クラブ・マネージャーの医療保護　患者の仮面のかげに　いい医師とは　患者の論理・弱い立場の論理　術後五年生存の苦しみ　贈りもの　付け届けをめぐる心情　ある老人のぼやき　医師をめぐる患者の不信感　医学にも流行がある　昔ならガンだったとは？　くるくる変わる手術の尺度

第3章　手術台のニアミス　78

外科手術のニアミス　足が震えだすほどの大出血　〝精神的な苦痛〟に六千万円の請求例　誤診とは　医師の誤診率　名医とは何か　切る必要のない手術　見逃し三度も手術をした理由は　患者にとって見逃しとは、誤診とは？　暗黙の医療契約――もう一つの見逃し　患者からの症状の訴えがない部位に　医師と患者のあいだの曖昧さ　手術の契約書　〝いったいだれが手術をしたのか〟　医療に契約はあるのか　異議申し立てと医療訴訟

第4章　あるエリート社員の入院　107

若年者胃ガン　二十二歳のＯＬ　三十歳以下の発生率　急性腹症　二十四時間の手遅れは致命的　奥さん業という名の超大企業　ある母子像　高校生からの年賀状　ウィルヒョウ転移とは　悲しみに耐える少年　あるエリートサラリーマンの入院　注腸検査のひまもなかったというが　会社からの疎外感　会社人間の生きがい

第5章　治る治らない　129

様々な死因　不正確な新聞記事　自動車事故に会う確

率と手術の危険度　本当の死因は何か？　初めての手術　人工肛門をつけた患者の余生　医師の自責の念
おかゆ療法VS近代医学　今日の医学書にもない療法
最新医学が老医師の旧式療法に負けた　二つの胃炎
ウソの診断が正しかった　胃粘膜は全治していた！
治る治らない　三年間に五回も手術されていた　治癒から増悪まで　そのとき医師に何ができたか　最もよい治療とは　治療法が一つとは限らない　〃その場の雰囲気〃というものがある　ある国際心臓学会　生命を自然のままにとらえる風潮　華やかな心臓移植ではなく

第6章　ぜいたくな医療　171

安楽死というが　そのとき医療はどうなるのか　安楽死イコール超管理社会ではないか　自然に何もしない？
二十二年ぶりの入院　生命の限界を試す　生きているからこそ死を希う　安楽死論争の不快感と悲壮感
痛みに耐える　痛み止めは回復を遅らすのか　拷問の痛みを思いだしていた患者　麻薬中毒　痛み止めのつもりの麻薬注射が　看護婦たちの声　ぜいたくな死
高カロリー輸液とは　ぜいたくな医療の後に何が残ったか　保険外に月々七十万円の費用

第7章　高齢化社会の医療とは　199

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ある深夜の〝討論会〟――父の法事　いざとなったとき母親をどうするか　もっと強い痛み止めを打つと　第四の療法　点滴・輸液につながれた生命　なぜ点滴をするか　人間の生死は点滴の問題　八十歳の余命率　高齢者を手術する　何歳までメスに耐えられるか　手術で延命しても老人性痴呆は救えない　自然な余生、人工の余生　開腹したが病巣摘出はしない　自然に生きてもらうのがいい　老人医療　手術は九〇パーセント安全だが　手術は成功したものの　平均寿命以後の手術

第8章　メスの崩壊する日　231

メスの崩壊　メスの名医をめざして　臨床外科の三位一体説　人体のいたるところに侵入したメス　メスの限界があらわれた　外科手術は脳移植に成功するか　医学からの新たなメッセージ　メスも人を殺す　心臓バイパスの死亡率　患者を外科医に渡さないケース　成人病医療とは〝中古住宅〟対策　私なりのメッセージ　メデュトピアへ　エジプトの王家の谷で考える　メデュトピアとは何か　新しい医療の場へ向かって

あとがき　258

装幀　宇佐見圭司

ガン病棟のカルテ

第1章　丸山ワクチンか早期発見か

ガン保険

ガン保険が大繁盛という。掛け金が安く、加入する動機も、飛行機に乗る前の掛け捨て保険と同じく、一種の安心料といった点がうけているのであろう。定期検診や人間ドックの精密検査を受けて、もし悪性の病巣がみつかったら、入院費用だけで家庭経済が崩壊しかねないという話をよく耳にするが、その話を裏づけるかのように、ガン保険に入っていることを申し出る患者も少なくない。

消化器外来に、ガンを心配して来院した、A氏もその一人だ。

A氏は、一見、まったく健康そのものの平均的なサラリーマンで、生まれてこのかた、病気らしい病気にかかったことがないという。

その彼が十月ごろから便に血がまじり始め、近くの開業医で「痔」だと診断され、二カ月ほど治療をうけた。しかし血便はとまらず、最近不安になって、検査のため来院したということだっ

た。検査を始めると、直腸に、約四センチのガン性潰瘍の所見があり、診断としては典型的な直腸ガンである。

「こりゃあ、手術したほうがいいなあ」

「先生、ガンの心配はありませんか。もしガンなら、数年前にちょうどガン保険に入っているんですぐ使ってください」

「いやあ、使おうったって使えないな。残念ながら、君にはガン保険の資格はないんでね」

と言いながら、本人には「直腸潰瘍」、家族には「直腸ガン」と話して、手術の承諾を得た。

本人にはガンの心配はないと話し、家族にはガンであることを告げるのは、私たちの日常的な仕事の一つだ。

手術はうまくいき、人工肛門も働き始め、われわれもほっとしたころ、奥さんが、ガン保険用の診断用紙をもってきた。診断書について、法律的規則がどうなっているのか、私はよく知らないが、いちばん大切なことは、病名の正確な記入だろう。

しかし、ことガンの場合、われわれは病名について、極めて神経質になる。

「ガンではありません」と説明をうけていたガン患者が、医師側の手ちがいで「ガン」であることを知ってしまい、家族から沈痛な抗議をうけ、釈明に冷汗をかいた医師は、少なくなかろう。

最近でも、診断書に「ガン」と記入してくれるな、と注文をつける家族の要望によく出会う。

しかし、ガン保険の診断書に「直腸ガン」と記入せずに、直腸潰瘍としておいたのでは、当然のことながら保険金はおりまい。

奥さんの差しだした大層立派な保険会社の診断書用紙に病名を記入しながら、私は氏名欄にコンピューター用のふりがなコードがあることや、会社が米国企業の日本支社であることを知った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com